

ラボの世界

THE WORLD OF LABO

- 1 10代とともに 行間をだいに
- 4 Go Ahead! Special 宮城県・高橋 潮氏
- 6 ラボ・インターンにきいた ここが違った！ 日本とアメリカ
- 7 東京言語研究所 公開講座 愛想のない文章とどう付き合うか
- 8 Go Ahead! 神奈川県・吉住瑞穂氏／Information



一人ひとりの経験が
みんなの大きな宝物！



10代とともに

冬野 ユ ミ

Yumi Tono

愛知県名古屋市出身。3歳よりピアノを学ぶ。10歳のときハモンドオルガンに出会い傾倒、14歳でプロデビューをし、演奏活動開始。学生時代よりピアニスト、キーボーディストとして活動する傍ら、作曲家として映像・劇伴音楽に携わる。1990年、前衛的なエレクトロミュージックグループ、アート・オブ・ノイズの影響を受け、実験的かつジャンルレスな音楽を追求する音楽制作ユニットBANANAを結成。サンプリングを駆使したアルバム「叩き売りbanana」をリリース。1995年サウンドレコーディングマガジン主催「Ecole alternative artists」にて細野晴臣氏に自身の曲「密林の河」が認められアルバムに参加。2018年「アシガール」サウンドトラックがTunes Charts 連続第1位獲得。近年はドイツでの音楽録音（バーベルスベルグ フィルムオーケストラ）など国内外にこだわることなく良き音を求め、精力的にチャレンジ。多彩な音楽性は遊び心満載で、アンダーグラウンドとメインストリームを自由に行き来している。



行間をだいじに

「友だちが家に遊びに来てもしばらく陰にかくれていたような子だった」という冬野さん。ピアノ教室の練習は苦手だったけれど、好きなようにピアノを「遊び弾き」するよろこびを発見します。「遊び弾き」をしていくうちに、「流行りの曲を弾いて」と学校の人々からせがまれるようになりました。おとなになってドラマや映画の音楽をつくるお仕事をするようになった冬野さん。音楽をつくるとびきりの楽しさとご苦労を伺いました。

どんなお仕事を？

私は作曲家のなかでも、ドラマとか映画の曲をつくる、劇伴作曲家です。「職業作曲家」と自分でいっているのですが、ふだんは裏方の仕事が多いので、このようにみなさんの前で話すのはとても光栄ですが、緊張しています。最近の仕事としては、たとえば、2019年に放送されたNHK連続テレビ小説「スカーレット」の音楽を手がけました。いま取りくんでいるのは、2024年に放映されるNHKの大河ドラマ「光る君へ」の音楽です。これは紫式部のストーリーなのですが、まさにいま、ヘトヘトになりながらつくっています。

子ども時代はおとなしくて

幼少期はものすごく引っこみ思案で、友だちが家に来てもドアの陰からのぞいて見るような子でした。ごはんはあまり食べませんし、病弱で、とにかくおとなしい子。

3歳から習っていたピアノは、譜面通りに練習するのが嫌いでした。「そんなに練習がイヤならやめてしまえばいい！」と親にもいわれていました。

ところが、10歳頃からピアノの遊び弾きがとても好きになりました。流行の曲とかテレビから聞こえてくる曲とかに、自分で自由に伴奏をつけて演奏するのが好きになりま

した。小学校の教室の隅にあるオルガンで、休み時間にみんなに「あの曲弾いて」「この曲弾いて」などといわれるがままに弾いたり、合唱の本を借りてきて友だちとそれを見ながらハーモニーをつけたりしながら弾くのが楽しかったです。リコーダーや鍵盤ハーモニカとか、とにかく楽器で遊ぶのも大好きでした。それが自信にもなったのかなと思います。そこからいまの自分につながっているような気がします。

「人間の能力は1%の才能と99%の努力する才能でできている」とよくいわれますが、私は努力する才能はなかったのかもしれない（笑）。ただ、ピアノの発表会などで「すごくよかったよ」といわれるとうれしくて、それがモチベーションになって、短期集中猛練習はしていました。でも発表会がないと練習はしなかったです（笑）。クラシックは「基礎」ですからもっとまじめにやっておけばよかったなあといまになって思います。

学生時代や仕事を始めてからはピアノをやめたいと思ったことはありませんでした。

演奏する側から作曲する側へ

遊び弾きしていた延長で、15歳くらいからピアノを弾く仕事をするようになり、スタジオでシンセサイザーを弾いたりしました。

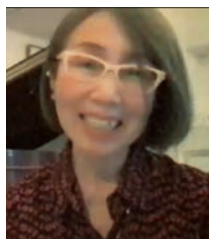
その後、22～23歳の頃にお芝居の幕間にライブで演奏する仕事が入りました。そのときにNHKのラジオドラマ（FMシアター）の演出家に出会い、「ラジオドラマをつくってみませんか？」と誘われました。そこではじめて劇伴作曲の仕事をして「物語に音楽をつける」というおもしろさに引きこまれました。

父はドラマの演出家でしたし、母も演劇少女でしたので、幼い頃から家族で映画やドラマを見ては「これはすごくよかったねえ」とか「こんな演出ではダメだ」とか「このカメラワークはこうでこうで……」などと話しあう日常でした。ですから、劇伴という仕事に出会ったとき、「音楽とドラマが合体する仕事というのがこんなところにあったのか」とうれしかったですね。そこから「つくる」ことのおもしろさにはまったわけです。作曲の楽しさを知った一方で、だんだん自分の演奏がへただと思えるようになりました。理想が高くなっていったのもあるでしょうが、もっとじょうずな人たちに演奏してもらおうほうがいいだろう、自分は作曲の仕事に専念しようと思いはじめました。

趣味が仕事になって

音楽を仕事にするようになったのですが、仕事には締め切りもありますし、仕事がない

10代とともに



ときは何か月もありませんし、「売れたい」とか「いい仕事がほしい」とか……そう考えるのはほんとうにしんどいです。また、純粋に楽し

く音楽を聴けず、ネタ探しをしたり、人の音楽を聴くとジャッジしてしまったりしてしまいます。よほど好きな音楽以外は聴く余裕や暇がないです。

作曲家としての努力

「こういう感じの音楽がほしい」といわれたとき、それはできません、とはいえませんが、独学でさまざまなジャンルの音楽を勉強するようになりました。たとえば映画音楽の巨匠ジョン・ウィリアムスの音楽をくり返しくり返し何度も聴いて、構成はどうなっているのかなど必死で分析しました。その後も自分で学べきものを探しながらそのつど勉強する、ということで仕事してきましたし、締め切りぎりぎりまで自分を追い詰めて努力しています。

得意なこと

劇伴作曲家はありとあらゆるジャンルに取り組まないとはいけません。私は「レベルの高い器用貧乏」でありたいと思っています。ですからたくさんの引きだしをもっているというのが、自分の「得意」なことです。「広く深く」というのを目標にしています。

作曲のおもしろさ

劇伴作曲家というのは、映像やおはなしに音楽をつける仕事です。映像やおはなしに音楽がはまったときの喜びはなんともいえません。悲しい場面には悲しい音楽、というのはよくありますが、映像と真逆の音楽がはまることがあります。こんなときは、神が降りて

きたーなんて感じで、盛りあがります。ドラマを音楽でブラッシュアップできたときは、幸せな気持ちでいっぱいになります。

劇伴音楽には、たとえば、どの場面に何分何秒の音楽をつけるか、という作り方があります。一昨年のNHKの連続ドラマのときは、その場面のことをいろいろ想像して、そこにあてる曲の時間を計算しながら、半年で150曲くらいつくりました。効果音担当の人もしょーになって演出家と映像を見ながら「当てて」いく作業をしました。その「立合い作業」はすごく楽しいです。

< Q & A >

Q) ドラマのなかで悲しい場面、うれしい場面などに合った音楽をつけるときに、感性というのはあると思いますが、法則性みたいな、科学的な方法はありますか？

いや、感性ですね。演出家の「ここにこういうのがほしい」という感覚をくみ取って、自分の感性をベースにつくりま

Q) 曲をつくるときに、どういうスケジュールでできるのですか？

1曲ごとにそれぞれ違って、5分でできるときもあれば、2週間たってもできなかったり、アレンジ、編成に時間がかかったりすることもあります。締め切りが近づかないとできてこないというときもあります。3日間徹夜ということも多いです。

Q) 洋画が大好きです。頭に音楽が残ることが多いです。なにか秘密がありますか？

基本的に、場面の映像やセリフがすごくよければ音楽もよく聴こえるものです。音楽も印象的になるに違いありません。それが秘密かな。「すぐ口ずさめるものをつくって」と昔はよくいわれましたが、私は口ずさめなくてもいいと思っています。「攻め」のパター

ンでつくっていて、音楽が心に響いたといわれるととてもうれしいです。

Q) 10年前の自分の作品を聴いて思うことは？

さすがにアレンジ力などはいまのほうがありますが、感覚的にはいいものがあると感じることもあります。ただ、これまでの時間でたくさんの曲を聴いて蓄積は増えています。ほかの作曲家などはだんだんシンプルな音楽になっていくという話を聞きますが、私はまだそのような状態にはなっていないと思います。

みなさんがよく知っているバッハやベートー・ベンの音楽は色あせません。彼らの音楽のことを知れば知るほど越えられないです。アフリカの音楽とかバリのケチャとか、ブルガリアのコーラスなども聴きますが、そうした民族音楽も越えられません。

ラボ・ライブラリー GT26『宝島』制作時
Q) 英語・日本語版と英語版をつくるということを、どう思われましたか？

英語と日本語で語られる物語に音楽をつけたことはありませんでした。同じ音楽で長さが違う……盛りあがるころでも、少しずつずらすのはほんとうにたいへんなので、最初はあまり理解せずにこの仕事をお引きうけしてしまいましたので「こりゃ、たいへんだあ」と思いました。

Q) 演出家と打ちあわせたときは？

物語に音楽をつけるというのは基本的には同じなのですが、「風の音とか銃の音とかをぜんぶ音楽で表わす」といわれたときにはびっくりしました……音楽にはメロディもリズムもありますが、ちょうどいいタイミングで音楽で表現しないといけませんので、いつもと違う作業になりました。風を表わす音楽をどうしたらいいか……など、たいへんでした新鮮でした。

10代とともに

今回は、「セリフをいただいて、それを流しながら秒数を細かく計って、そこに必要な音楽を入れる」という作業を延々とくり返しながら、音楽をつくっていきました。

Q) 効果音をつかわないで場面に合う音はどのように見つけるのですか？

もちろん「この音はこんな感じ」とある程度しぼってみるのですが、1,000以上ものたくさんの音源があって、一つひとつ確認しながら選んでいく、という方法をとりました。今回のために、たくさんのいろいろな音のデータを準備しました！

Q) 『宝島』でだいにしたことは？

音楽単体で聴いてもいいものにしたいと思いました。今回、ラボの『宝島』の台本を見て、音楽を少しおとなっぽくしたほうがおも

しろいかな、と思いました。状況を表す音楽はふだん私はつくらないのですが、今回はたとえば海賊のイビキの音楽、とかも状況を意識してつくりました。

Q) 『宝島』で悩んだところは？

テーマの音楽はエキゾチックな感じにつくり、そのメロディをベースに展開していく、というかたちになりました。そこがいちばんたいへんでした。それから最後の海賊の歌で、歌詞がうまくはまるようにつくるのも苦労しました。しかも日本語でも英語でもはまるようにするのはむずかしかったです。また、一度完成したものを「ここをもう少し変えられませんか？」と情熱とこだわりをもって依頼されたときは、感心するとともに困惑しました。完成したものを变えるのはとてもたいへんな作業なのです。あちらこちらを切りはり

するわけにはいかず、ゼロからつくらないといけませんので。

10代のわかものへのメッセージ

みなさんに伝えたいのは「行間をだいに」ということです。表現されていないところの感情みたいなものを感じられるようになってほしいと思います。テレビドラマや映画を何倍速かでみる人たちがいると聞いたとき、なんて悲しい見方をするのだろう、とショックでした。今回聞いてくださったみなさんは、とても感性が豊かだと感じました。どうか、行間を感じてみてください。デジタル化も進みいろいろな作業がかんたんで便利になってきていますが、ぜひめんどくさいことをたくさんしてほしいです。

(文責：編集部)

インタビューを終えて

[取材協力] 広島県のラボ・パーティ

稲田智子P、津森裕子P、天田陽子P、佐伯真紀P

稲田智子パーティ

●高野心晴(高3) 冬野さんの職業のことだけでなく、「基礎がだいじ」というためになる話を聞くことができました。ふだんにげなく聞いているラボ・ライブラリーの音楽のつくり方について知る機会がないので、とてもいい経験になりました。

津森裕子パーティ

●松井優希(中2) 印象に残ったことは3つあります。ひとつ目は、趣味を仕事にして変わったということです。仕事となると、楽しく音楽が聴けずネタ探しになるとおっしゃっていましたが、努力をして自分ない分を補っていたと聞いて、とても納得しました。ふたつ目は、音楽づくりについてです。セリフの裏ではなく単体としてもすばらしい音となるようにつくっていると聞き、音楽への思いを感じることができました。3つ目は、行間をたいせつにしてい

いとおっしゃっていたことです。始めに聞いたときは「聞てなにもないところじゃん！」と思っていました。しかし表現されていない「間」にもそれぞれの思いがあってとても考えさせられるなど感じることができました。

天田陽子パーティ

●川本 彩(高3) 『宝島』の音楽を作曲された方のお話が聞けると聞いて、とても楽しみにしていました。お話を聞くなかで、なるほどと納得したり、新しい考え方を知ったりということの連続でした。なかでも、大砲や鉄砲の音も楽器で表現する、というお話はとくに印象に残りました。今回のお話を聞いたことで、自分のなかでテーマ活動の音楽に対しての思いが変化したように思いました。●佐伯大翔(高2) 人生談を聞くというのがひとつの「物語」を見ているみたいで、ひじょうにおもしろいということを再認識した。冬野さ

んもこちらの質問に対して真摯に答えてくれたことがとても印象に残っています。●藤井春乃(中3) 音楽をつくっている人がどんな人が気になっていたけれど、とても気さくで質問も楽しくなりました。またこんな話を聞きたいです。●西村美咲(中3) テーマ活動した『宝島』の音楽がたくさんの時間と努力が必要だったことにあらためて気がつき、もう一度『宝島』の音楽を一から聞いてみたいと思った。●建山若芭(中2) 私は、『宝島』の歌や始まりの音楽がとても好きなので、どんなふうにつくっているのかが聞けてよかったです。私が感動したことは、ラボの物語を聴いて、子どもむけにはなくその物語にあった音楽をつくってくれたことです。●福井智道(中1) ぼくは、正解のない作曲のたいへんさのなかにある「楽しみ」を見つけることがたいせつなんだな、と知りました。ぼくもおとなになって働くとき、「楽しみ」を見つけていきたいです。●三浦和奏(中1) 冬野先生の子どもの頃の話聞き、3歳からピアノを習っていて「クラシックよりアニメの曲をみんなの前で弾く

のはすごく楽しくて好きだった」と聞いて、クラシックより好きな曲を練習してしまう気持ち、私もそうなのでいっしょだなと思いました。先生は幼いときに好きだったことが仕事になっていて、幼いときに好きだったことってたいせつなんだと思いました。子どもの頃の話は、すぐ共感できることが多かったです。今回先生の話聞くことができて、劇伴作曲家の仕事をはじめて知ることができ、楽しかったです。●広幡咲弥(中1) ラボのCDの曲は、一からどんないろいろな音やリズムを組みあわせてつくられているということが知れてよかったです。

佐伯真紀パーティ

●中村亮太(中2) どんな劇伴音楽をつくるときでも一つひとついいねにつくっている冬野さんにびっくりしました。劇伴作曲家のやりがいや趣味を仕事にすることで生まれたデメリットなど、たくさん興味がわく話をしてくださって、時間が過ぎるのが早く感じました。

[取材日] 2023年4月

高橋 潮さんは、北米交流、中国交流、そしてオレゴン国際キャンプと、3度もラボ国際交流に参加しました。幼い頃からラボ活動にどっぷりとつかり、さまざまな経験をされた高橋さんにその経験をふり返っていただきました。



高橋 潮 (たかはし みなと)

株式会社 S・Y ワークス
経営コンサルティング

(宮城県・岡本富紀子パーティ, 神奈川県・富永美智子パーティOB)

三世代にわたってラボ活動

私の祖母は、ラボ・パーティがスタートした当初のラボ・チューター(指導者)で、50年間ラボに関わりました。その影響で母も叔父もラボ会員。母は仙台市に引っ越してから私たち兄妹にラボ活動を続けさせ、三世代で活動が続けることになりました。家や車の中でラボ活動の物語CD(英語・日本語)を聞くのがあたりまえでした。

私自身は幼稚園から大学生までラボを続け、社会人になってから数年後に地元の仲間たちとラボ・フェローシップ活動(おとなのラボ)に参加し、30年間ラボに関わっています。学生時代のラボ活動仲間とも仲がよく、ときどきいっしょにデイキャンプに行くなど、つながりをだいにしています。

国際交流での出会いと記憶

私は今までラボ国際交流に3回参加しました。1回目は2005年の中1のときの北米交流でインディアナ州、2回目は2010年の高3のときに地元のラボ・チューターに誘われて中国交流、2012年の大2のときはカレッジ

リーダー(引率者)としてオレゴン国際キャンプに参加しました。私が高校まで所属していたラボ岡本パーティは当時大所帯で、お兄さんやお姉さんたちがたくさんラボ国際交流に参加していて、かっこよく見えていました。でするので自分が国際交流に参加することはあたりまえだと思っていました。

オレゴン国際キャンプは「仲間との絆」が生まれるプログラム

さまざまな国際交流プログラムに参加するなかで自分の人生を大きく変えたのがオレゴン国際キャンプでした。「私が帰る場所」になったのです。その経緯は順を追ってお話します。

オレゴン国際キャンプの主催と運営は、OMSI(オレゴン科学産業博物館)です。ほかのラボ国際交流プログラムのようなホームステイではなく、参加者みんなが大自然のなかをともに行動します。そしてここに「アンバサダー」と呼ばれる現地参加者(オレゴン州周辺の高校生から大学生までの男女)が、ぼくたちの拙い英語や日本語がとびかうなか、同じ風景を見て同じ経験をします。彼らと「仲間との絆」を感じ深めていけるのがこのキャンプの醍醐味だと思います。

3週間かけてカリフォルニア州の巨木の森に行き、オレゴン州を一周し、最後にオレゴン州の中心地、ポートランドに着きます。私たちがそこに着いたときは土曜日で、毎週行なわれるSaturday Marketの日でした。100近い出店者が軒を連ね、大にぎわいのイベントでした。毎週こんな祭りがあるのか!……と、当時の私は、その光景を見た瞬間にこの街が好きになりました。これ以降、「ポートランド」とい

う街がいつも私の頭の片隅にありました。



オレゴン国際キャンプでカレッジリーダー



オレゴン国際キャンプのアンバサダー
(現地参加者)たちと

アメリカに帰る

大4まではラボ活動づけでした。神奈川支部の大学生リーダーをしながら首都圏の活動にも参加し、大4では全国の大学生が集まる「わかもの」の実行委員・広報のリーダーをしました。

同時に就職活動もしましたが、なかなか身が入りません。ラボ活動が忙しいのもありましたが、「自分の人生このままでいいのか」と考えていました。ふと、私のなかでやり残したことがあつことに気づきました。これだけ国際交流に参加をしながら、高校留学に参加していなかったことです。「留学がしたい」。その思いが日に日に強くなり、両親を説得して大学を卒業してからサンフランシスコに行きました。

「人種のサラダボウル」ということ

ばはもう古いかもしれませんが、私のまわりは中国人かインド人が多く、白人は3分の1で、ほかに日本人をふくめたアジア人が少々。世界を圧縮したような人種構成がそこにはありました。

語学学校に通ったあとに「ビジネス会計学」を専攻しながら、日本の大学の単位を移行しつつ、1年で大学を卒業する目途を立てられました。そしてまた、「これからどうしよう……」。新卒というブランドを捨てて決意したアメリカ留学。が、その先が見えません。そのときにふと「ポートランド」という街のことがよみがえってきました。

ポートランドに帰る

なにかをもとめるように私は、あの感動を覚えた場所、ポートランドに行くことを決意しました。そしてサンフランシスコから飛行機で1時間北上し、5年ぶりに戻ってきました。なつかしい空気、サンフランシスコのような大都会とは違ったあたたかいにぎわいがありました。

ポートランドの人たちはローカルなカフェが好きで、レストランも「地産地消」をプライドにしているところが大半。キャッチコピーは、「Keep Portland Weird (へんてこでいこう!)」……『ふしぎの国のアリス』みたいですよ。

いちばん感動したのは、Farmers Marketでした。地元の農家を中心に、酪農家やコーヒーショップ、飲食店が100店舗ほど軒を連ねていました。

Saturday Marketとは少しはなれた場所で開催しているFarmers Marketは、まさに「街の台所」。1週間分の食材をここで調達するのがポートランド流。心打たれたのは、出店者も来場者もみんながこのMarketが好きでたまらない、と伝わってくることでした。ある農家に行くと、「このほうれん草買うなら、次はあそこの酪農家さんで牛乳買ってシチューにしてみな。この

時期は最高だよ！」とのこと。そんなふんいきに心底惚れました。

「ここで働く！」そう決意をして、大学を卒業したのちにOPTというアメリカの就労ビザを取得し、ポートランドに単身引っ越しました。そして、就職活動に苦戦しながらもなんとかポートランドFarmers Marketでの就職が決まったのです。



Farmers Market の仲間と

人とのつながりをたいせつに

当時、日本では空前のポートランドブーム。たくさん日本人が来るから、ガイドをしてほしいというMarket側からの依頼がありました。働き始めると、たくさんの出会いと再会がありました。ラボ全国キャンプでシニアメイト（リーダー）をしていたときに参加した子が遊びに来てくれたり、祖母が国際交流引率をしたときのカレッジリーダーの方がサンフランシスコ在住で遊びに来てくれたりしました。

毎日Marketのようすをブログに書き、Facebookに投稿していると、なんと2012年のオレゴン国際キャンプにいっしょに参加したCarsonが「なんだ、ポートランドにいるのか！遊びにいくよ！」と来てくれました。仕事中でなかなか話せず、「じゃあ終わっ



オレゴン国際キャンプで出会った Carson が来てくれた！

たらビールを飲みに行こう！」と誘ってくれて、いっしょに飲み明かしました。参加当時はあまり話せなかったのですが、留学をしてある程度自由に英語を話せるようになったのでたくさん話しました。「こんなおもしろいやつだったのか！」。ひとつの言語で世界がこれだけ広がるのかと感動した時間でした。

1年間の就労ビザが切れ、日本に帰り、いまは地元・仙台の経営コンサルティング会社に勤めています。「ポートランドみたいなFarmers Marketをいつか日本にもつくる！」を目標に邁進中で、現在は経験を生かしてお菓子屋さんなどに地域とつながれるマルシェの提案などを行っています。

これからラボ国際交流に参加する人へ

「必要・必然・最善」。これは私がいま働いている会社の社長が教えてくれたことばです。どんなことも自分にとって最高のタイミングでやってくる。私がオレゴン国際キャンプに参加する機会は、いまの自分の志を生むためにやってきたのだと思います。ラボ活動のなかで国際交流は格別です。ことばの壁というつらさの先に自分にとってたいせつなことを経験できる。それがなにかはわかりませんが、あなたがいま国際交流に参加するのは未来の自分がそうしろといっているからかもしれません。きっとなにかの意味があると信じて、自分にとっての夜明け、Another Dawnを見つけてください。

ラボ・インターンにぎいた

ここが違った！ 日本とアメリカ



☆…日本とアメリカで違うことってなんでしょう？ ことば？ 食べ物？ 服装？ ラボ・インターンのふたりに、日本とアメリカでは、どんなことが違うと感じたかきいてみました。Kailee は「ほかの人に見せたくないもの、知られたくないこと」、Audrey は「ほかの人といるときにどうふるまうか」に違いを感じたようです。



Kailee

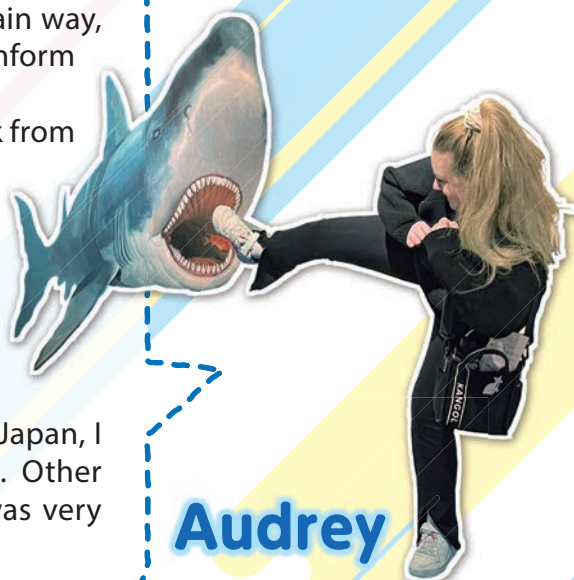
The biggest cultural difference for me was how people treat privacy. Japanese and American people tend to think of very different things as personal or unshareable, like your naked body. One big way I experienced this is how people use an onsen. America also has hot springs that you can swim in, but everyone wears a swimsuit! I don't think many people in America are comfortable being naked with other people, even if they are close to them or of the same gender. Going to a hot spring in Japan felt weird to me at first, but I realized that nobody really pays you any mind if you mind your own business.

On the flip side, Americans are much more comfortable discussing their personal lives with strangers or coworkers than Japanese people are. It is common to hear people in America talk about stuff like family illnesses or troubles, even with people they are not very close to. That does not happen in Japan!

A big cultural difference for me was group behavior. Kids are taught in the US that if everyone is doing something a certain way, it is better to do it differently and stand out rather than conform to the group.

In Japan, however, it is generally culturally taboo to break from the habits of a larger group. Kids learn this from a young age, inside and outside of school, and quickly realize to conform in most social situations.

An example of this is when giving your personal opinion. I studied political science at Sophia University in Tokyo. The courses were very discussion-based, and the professor frequently prompted the class with questions. In the US, many classmates wanted to share their opinions. In Japan, I was often the only student to speak in a class of 30 students. Other students would avoid eye contact and stay silent, which was very strange to me!



Audrey



愛想のない文章とどう付き合うか

— ポライトネスの視点からとらえる文学作品 —

阿部公彦（東京大学）

1966年神奈川県生まれ。東京大学文学部卒。同修士課程修了の後、ケンブリッジ大学大学院博士課程修了。博士（文学）。東京大学大学院人文社会系研究科准教授を経て、同教授に。英米や日本の詩や小説を中心に、「メランコリー」「退屈」「即興」「事務能力」「胃弱」などの視点から研究を進めている。著書に『英詩のわかり方』（研究社）、『小説的思考のススメ』（東京大学出版会）、『文学をく凝視する』（岩波書店）、『幼さという戦略』（朝日新聞出版）など。

阿部公彦氏は幼少期をカナダのヴァンクーバーで過ごしたこともあり、言語的に不安定な時期がありました。5歳で日本に帰国したときには、文化的な違いもあり、しばらくのあいだ、「あまりしゃべらない子」だったとのことでした。

そうした経験があるせいか、氏は言語運用が必ずしもうまくいくものではないという認識を長くもってきました。そしてそのおかげで逆に「言葉がうまく伝わるとはどういうことか？」という問題意識ももつようになりました。

その後に氏は文学研究の道に進むこととなりますが、その研究の過程を通して少しずつわかってきたのは、書かれた文章といえども、オーラルコミュニケーションと同じような「交渉」が関わってくるのではないかと、ということです。これは氏の原体験である、言語運用をめぐる不安とも結びついているようです。氏が明らかにしようとするのは、小説などの「書かれた言葉」においてもオーラルコミュニケーションと同じ不安定さや、場合によっては「危機」のようなものが必ず生ずるということです。コミュニケーションは、そうした不安定さや危機を乗り越えるというかたちで実践されるのではないかと。

今回の講座では、文学テキストの受容過程でなにが起きているかを、そうした不安定さや危機の要素を前提にしながら見ていきました。そうした視点をもつと小説の語り手の態度に「べたべたしている」「いばっている」「甘えている」「さっぱりしている」とさまざまな関係の取り方があることが見えてくるでしょう。小説はとても「人間関係的」なジャンルとしてできあがっているのです。

あわせていえば、小説では登場人物同士だけでなく、読者も登場人物を裏切ることがあります。読書とはこうした「擬似関係」の集積だといえるでしょう。

太宰治は志賀直哉の「心づくし」の欠如を断罪している。太宰作品は、読者への訴えかけの身ぶりがその小説的語りの原動力といえる。この太宰にとって、志賀の小説の「ひとりごと」に終始する文章など考えられなかった。整理してみると……

- 太宰の読者とのスタンスのとり方は「読者にしなだれかかるとような接近のポーズ」。読者もまた接近する。
- 志賀の「ひとりごと」の文体にも濃厚な聞き手への配慮と関係性の構築のもくろみがあると考えられる。

志賀はあえて「ひとりごと」に近い姿勢をとり続け、太宰とは逆に、離反や停止や拒絶に根ざしたポライトネスを実践。近づくことよりも遠ざかることによって、志賀は親しさを表現。距離を保つことで全うされる「真均さ」と切りはなせない。

<講座当日のレジュメ内容>

- 1) 書き言葉は「親切」になれるのか。
—文学作品は読者にどう働きかけるか。
—「詩は照れくさい」の原因。
- 2) <です・ます体>の謎。 ※書き手と読み手の関係
—なぜ論文は<です・ます>で書いてはならないのか？
—なぜ法律は<である体>なのか。
—なぜ新聞のお詫び記事は<です・ます体>なのか。
- 3) 太宰治と江戸川乱歩と森鷗外の「親切度」を比べる。
『人間失格』（太宰治）、『怪人二十面相』（江戸川乱歩）、『雁』（森鷗外）を例にとって。
- 4) 志賀直哉の「愛想のなさ」の奥行き。
—小説と「無愛想」の戦略。



「エンリョしないで」

吉住瑞穂
精神保健福祉士

2006 年の中2の夏。私はコロラド州でホームステイしました。ホームシックのときに Mom からかけられたこのことばがうかびます。そのとき、Mom は日本語の辞書を持ち、懸命に私に話しかけてくれました。

ホームシックはなんとか乗り越えましたが、その後も思うように自分の気持ちや希望を伝えることができず、ホストとの関係にも悩んでいました。正直、思い描いていたステイとはほど遠いものだと感じ、悲しくなる自分もいました。このままステ



ホストときょうだい4人

イが終わるのはいやだと強く思い、Mom に相談してアドバイスをもらい、ホストと少しずつコミュニケーションできるようになりました。

最後には自分のなかで納得がいくステイとなりましたが、思うようにコミュニケーションできなかったという悔いは残りました。その思いに突き動かされ、2008 年、高1の夏に韓国交流に参加しました。この交流では、韓国ラボの活動にも積極的に参加し、とても楽しい時間を過ごすことができました。

現在も、アメリカのホストファミリーとは Christmas Gifts のやり取りをしたり、SNS で関わったりと、交流は続いています。2015 年秋には、コロラド州で行なわれたホストの結婚式に参加しました。

私は現在、精神科クリニックで精神保健福祉士として勤務しています。業務は、患者様の入院調整、就労支援などの障害福祉サービスの案内や、関連機関との連絡・調整等、多岐に及びます。どの業務も患者様がどんな希望を抱いているのか、と

もに考え、支援の方向性を検討していくことが肝心です。ときには葛藤や苦しみを語る方もおり、ことばの重みや怖さを実感することもあります。私はそのたびに、「エンリョしないで何でも相談してくださいね」と声をかけています。そう、あのときの Mom と同じことばを私はいま、患者様に伝えているのです。

ホームステイとラボ活動で培った相手の立場や気持ちを想像してことばを紡ぐ力は確実に生きています。

この記事を読んでくださっている方のなかには、ラボの活動のことで悩んでいる方もいるかもしれません。でも、ぜったいだいじょうぶです。いま悩んでいること、苦しんでいることにはかならず意味があります。ですから焦らず、しぶとく、あなたらしく、ラボ活動をやり抜いてください。

よしずみ みずほ＝精神科クリニック勤務

(神奈川県・長谷川祐木子パーティ、同県・岩楯 幸パーティ OG)

Information

国際交流親善事業報告

- 第36期ラボ高校留学全国事前研修合宿(5/5～7 東京都・国立オリンピック記念青少年総合センター)

留学生15名(アメリカ、カナダ)が参加し、スタッフ2名、ラボ・インターン2名、高校留学経験者の大学生7名で対応。訪問国の全体像や高校生活について、ホームステイについて、参加者による英語でのプレゼンテーション、ケーススタディ、アメリカのラボ高校留学カウンセラーからオンラインで安全管理についてのレクチャーなど。参加した留学生はほぼすべて英語で進行されるなか出発にむけての心がまえを新たにしました。

- 全国引率者合同会議(5/20～21 東京都・ラボ教育センター本社)

2023 年ラボ国際交流引率のチューター・シャペロン24名、カレッジリーダー6名、事務局スタッフ11名が参加し、1泊2日での合同引率者会議を行いました。引率の役割と任務の確認をし、ケーススタディのワークショップなどを実施しました。

東京言語研究所

- 第1回公開講座のご案内

演題 言語の進化：階層性と意図共有
にもとづく仮説と実証
講師 岡ノ谷一夫(帝京大学／動物行動学者)

日時 6月3日④ 14:00～17:00

受講形式 対面および Zoom によるオンライン講義併用

- 2023 年度理論言語学講座のご案内

前期 5月15日より10週間

※祝祭日は休講

生成文法／認知言語学／音韻論／言語学概論／調音音声学／日本語文法理論／社会言語学／言語類型論・入門

後期 10月2日より10週間

※祝祭日は休講

生成文法／認知言語学／意味論／言語学概論／実験音声学／語用論／史的言語学／日本語文法理論／言語哲学